

# 立原道造にとっての津村信夫

大森 郁之助

I

立原道造が第二次『四季』（昭9・10・19・6）で年令・経歴の最も近い先輩津村信夫と識ったのはいつか、余り明確ではない。尤も、こう云い切ると却て抵抗があるかも知れなくて、のち昭和十二年七月、立原の第一詩集『萱草に寄す』が上梓された折、「今君つくる歌の記念と、かはりなき友情のしるしに」津村が同月号『四季』二十八号に寄せた「夏花の記」に、

六月末日（提灯の夜）

夕刻より、向島小梅町に堀辰雄氏を訪ふ。四季編輯の下準備なり。既に数氏の来客あり、未知の人多し。堀氏に紹介さる。葛巻義敏、高橋幸一、立原道造の諸氏なり。立原君は大学工学部の服を着したり。

（略）浅草の雑踏の中を歩む、諸氏と二言三言づつ語りあふ。談少しく詩文に触るれば、道造君目を輝かし肩のあたりをゆり動かす。雑踏の歩みのうちに、おのづから道造君の若く矜度ある魂も、（略）感受し得たり。

という、〈初対面の印象〉が述べられている。「そのかみの古日記より、その折々のことどもを誌し」という（同文まえがき）「夏花の記」の叙述は、津村の遺した昭和九年の日記「一九三四年」（角川版津村信夫全集三巻収）中にそれぞれ対応する記事があつてこれが原拠と考えられ、彼此見合わせて、昭和九年六月三十日が初対面とするのに何の問題も残らぬようだが、しかし「夏花の記」の叙述は右日誌の該部分と比較すると殆ど二倍近くに増量されている。その原日誌の方はかなりの誤字もあつて例えば荷風日乗のような公刊を予想した一種の作品とは思われず（生前未公刊）、従つて、更にその元となった原資料などの存在は想像し難いのだが、そうすると「夏花の記」での叙述増補は、原日誌以外のどんな資料に基づいてなされたものか。もし文字化されずに三年間筆者の脳裏に蔵されていた記憶によるものだとしたら、その増補部分はことの本質に於ては、或いは〈文学的〉には誤謬がなくとも、ドキュメンタリーな意味での程度の正確さを負わさるべきものか。

事例によって示そう。原日誌の該記事末尾の「葛巻、高橋両氏

とタクシーにのりかへる。葛巻氏と再会を約した件が「夏花の記」で省かれているのは、こちらの文の主題である立原とは別れた後の場面ゆえの処置と納得される。しかし原日誌に見えない隅田公園の畔で「夕闇に合せ神西清氏に逢ふ」との記述は、三年後の時点であの折の事だったと確認する資料が、記憶の他にあつてかどうか。同様に、原日誌には全く記載のない「大学工学部の服……」「談少しく詩文に触るれば……」といった立原の印象、そのもの（立原が或る時そういう態度をとったという事実）は確かでも、その印象がこの宵のものだったというのとは別のいま一つの構成要件であつて、その方を確認するメモワール等はあつたのか、どうか。その当日即座に、すなわち原日誌に、書き留められていておかしくない印象的な事柄が三年後に新たに書き加えられた場合、当座は書き留められなかった理由が想像出来て欲しいし、逆に、当時記されなくて当然な些事が書き加えられた場合は、それが記憶に残っていたことに瞠目せねばなるまい。

——以上の理由によつて、今「夏花の記」の記述は一と先ず措き、<sup>(注1)</sup>それ以外の資料——「夏花の記」ほど明快かつ包括的に示してはいないが反面善意の潤色も含まれ得ない、直接的な資料によつて、見極め得る所まで見極めておきたい。

『四季』再刊の為の会合は堀辰雄の主唱によつて九年五月から六月にかけて頻々と開かれているが、津村はその頭初からその相談に加わっているもの<sup>(注2)</sup>、立原が出席するのは六月に入つて、かなり改まった形の会合になつた段階からのものである。六月に入つて恐ら

く最初の、六日、銀座・大阪ビル内レインボオ・グリルでの会合に、立原も出席したとする年譜が多い（角川版六卷本立原道造全集年譜、思潮社版・中村真一郎編『立原道造研究』年譜、文京書房版・小川和佑『立原道造研究』付載「四季」年表、等）が、翌七日付（消印八日）で立原から津村に同人誌『偽画』創刊号を送呈したことを告げる書簡に、献本の口上のみで（昨夜の）同席に全く触れていないのは、いずれにしろ未だそう親密な仲には成っていなかった筈の時点での年長者への挨拶としては些か訝かしい。両者の同席が確認でき<sup>(注3)</sup>るのは、前引「夏花の記」の原拠日誌で「レインボグリルに於て四季同人会あり。堀、丸山氏に逢ふ。」と記した（立原の名は無い）六月六日付の部分の次項（時間的間隔は不明）に

夜、本所向島公園の近所、堀辰雄氏宅に行く。四季の編輯のこ  
とで葛巻氏、立原氏、日下部氏ら見ゆ。

（傍点引用者、以下同）  
と明記している折である。この記事の骨子は「夏花の記」と同じだが、日誌の方は記事の見出しに「浅草の夜（提灯の夜）」とのみ記して、日付を欠く。角川版津村全集年譜はこれを「二十五日頃」、六卷本立原全集年譜では「三十一日」としていて明確でない（「夏花の記」に全面的に依拠すれば別）が、全集に抄録された日誌の記事の構成から或程度の推測は可能と思われる。

右「浅草の夜」の後（小泉信三宅訪問（夜十一時散会））（葛巻義敏訪問（夜ふけて去る））（小泉研究会ピクニック（夕刻解散。なおこの日はその後「夜八時頃」堀来訪、「十一時頃」送り出す）の三件（内容上、当然三日に亙る）及び（本文採取を省略した日）（全集編

注による)二、日分を隔てて、即ち、原日誌にも記事を残さなかった日の存在の可能性を考慮に入れば六日目乃至それ以降のことと見られる位置に

①土曜日の夜、久し振りでフロイライン・フォン・クラヴィアを

訪ねる。／一人で留守してゐたりき。この人に少し苦言を呈す。

と記し、更に「本文採取省略日」一日分を間に置いて「夏日の情」と題した部分に

②昨(マツ)の夜、碑文谷にクラヴィア姫を訪れしが病人ありてユツクリ

語る能はざりき。／日劇の招待券ありしたため、外村嬢を誘ふべ

く電話す。貞美さんは不在(略)

次の「小石川丸山町の夜(七月七日)」に

③夕べ心騒ぐ。(略)ふと思ひつきて、カゴ町の外村貞美さんに電

話す。電話口に出できたりしは彼の君にして(略)

とある。①の「無音鍵盤」嬢は「一人で留守」、②の前夜は「病人」がいたのだから別の機会、又②の当日は外村嬢不在で③では在宅したのだから②と③も別の日である。③の「七月七日」は暦を繰ると土曜日(全集収載本文の日付下に日曜とあるのは編者の誤註記)だが①とは別の土曜日で、かりに翌週とすれば①は逆算して六月三十日、その①より最低六日前の「浅草の夜」は遅くも六月二十四日と考えるべきだろう。

もっとも、ここまでは通例に沿って『四季』の為の会合での二人の出会いを素定して来たのだが、それ以外の場で『四季』の会合と会合の間に)初めて顔を合わせた可能性はどうか。

九年の五月末以前に両者が識り合ったことはなかったらう、とは

云える。かねて堀を通じて入手を依頼してあったらしい、津村らの同人誌『四人』(昭6・12・8・1)を堀宅へ出向いて受取った立原は、六月一日消印の札状に

けふ、堀辰雄先生のところへ伺ひへ四人へいただきて ますり

ました。／ありがたう ございます。ぼくたちも そのうちに

雑誌をはじめるのですけれど やはり同人が四人なので 堀

先生におたのみして いただくやうに おねがひしたのでござ

います。／雑誌は 六月上旬創刊。へ偽画と申します。目次や

後記の組方に早速へ四人をまねさせていたゞいて、よろしい

でせうか。

と書く。「六月」月上旬創刊予定という云い方は譬え一日違ひでもまだ六月になっていない五月末の発想かと思うが、札状としてもかなり改まった口調もさることながら、入手の希望を堀に仲介して貰い現物も堀宅に留め置いて貰って取りに行くというのは、立原の方はかりに遠慮からとしても、津村にすれば面識のある相手なら直接送ってやっていい筈である。恐らく、津村の側では話に上った(例えば堀との間で)こともない全く未知の相手、といった関係だった証ではないか。

しかし六月に入ると、例えば前引七日付の『偽画』献呈の口上は前日六日の『四季』の会合では会っていない心証は与えるが、より以前に(上限は五月末だから範囲は六月上旬で、従って数日前に)も会っていないかどうかは、察し難い。会っていることを想像させる徴証もないが、その逆も又無い。一方津村側の材料としては、前引「浅草の夜」の堀宅の会合で同席した相手としての掲出に只「立

原氏……見ゆ」とするのみなのが、気にならぬでもない。同日誌でその前後の、明らかに初対面の場合の表現を見ると「小林秀雄、深田久弥、永井龍男、今日出海氏に紹介さる。」「横光利一に紹介さる。」（六月六日の項）というふうには、フルネームを記すようである。小林らと立原とは少なくとも来簡の有無という差があり、形は初対面でも中味が違う、ともいえる。しかし反面、小林らのような既成文壇人に比べて人物についての予備知識が成立していない（来簡といっても札状・送り状だけでは）立原の場合、実際に会ったの印象はより注意に値した筈とも考えられる。小林らに比してやはり事前の知識量は少なかったかと思われる相手との初対面記事が七月中旬に出てくるが、そこでは「福原清に対面す。福原氏は船の家に住みたりき。」増田篤夫氏を訪ふ。かの三富朽葉の親友なり。蒼白の人にして大変喜んでくれる。」といった寸感を添える傾向が窺われるのである（後年の加筆の為疑いが生ずるが、本来は「夏花の記」のような書き方のほうが、この折初対面ならば似つかわしいのである）。

しかし又それと逆方向の心証もあるので、日誌の七月二十八日付信州千ヶ滝滞在中の記事に「立原道造君、僕を訪ねて来た。」という出し方をする。既に東京で（遅くも堀宅の会合で）面識を持った後だから「君」と親しみをこめたのなら、そう変る前の「立原氏」だった堀宅の会合では未知の相手だった証左にならうか。相反する二方向の心証の、仲をとれば、六月下旬（？）堀宅で正式に紹介され談笑を交える以前に、偶々行きあう程度の顔を合わせた事（記憶）は有ったのか——とでも想像することにならうが、しかしそう足して二で割った答のようであったかどうかは何とも云えない、というの

が、現在敢て結論を云うならば、公正なところだろうか。

ところで津村との相識の時期という問題と一部重なりながら多少ずれる問題として、立原が第二次『四季』に参加したのはいつごろから、どういう資格に於てだったか。

後述、十一年二月号の段階で「これまでの同人」とされる五人の中で、九年十月創刊号の時点で表紙に「三好達治・丸山薫・堀辰雄編輯」と掲出（奥付には「編輯代表者堀辰雄」）された三人の地位は、既に七月、堀が『四季』再刊を宣言した「限定出版四季社・江川書房季報」九号（昭9・7・15付）掲載の「『四季』再刊について」の中に「大体の編輯は三好君と丸山薫君とそれから僕とがあた」る旨予定されていた。更に右堀文では、その他に「葛巻義敏、津村信夫の両君が実際の事務を見」るスタッフに予定されていたのが、十一年二月・第十五号の「四季消息」で

『四季』は今月から組織の上に多少の改変をした。これまで同人であつた、三好、丸山、堀、津村、立原の五名に、事実上同人同等の厚志を寄せて貰つてゐた九氏を加へて、いまここにはつきりと四季同人として発表する。

とあって、この告示の眼目ではなかつたらうが頭初案における葛巻が立原に替つていた事も判る。

編輯担当者と違つて、実務担当者の名は創刊後は改めて明示されることなく来たのだから、「……再刊について」発表後第十五号迄の間のどの段階で、葛巻が抜け立原が替つたのか、創刊の前か後か、交替の間にブランクはなかつたか、逆に葛巻・立原が二人並んでそ

の任にあたった時期はなかったか、等は、正式な表明としては確かめ難い。ただ一つの示唆として、九年六月二十五日の銀座資生堂での会合には葛巻の方は間違いない堀と呼ばれており(6・22付書簡に「こんど月曜の夕七時資生堂でみんなで落ち合ふ 君も来てくれないか」とある。次の月曜は二十五日)、その直前(?)の堀宅の会合(前述)には立原と並んで出席している(津村日誌、前引)。この事から判るのは、六月下旬の時点ではまだ葛巻が、少なくとも名実共にスタツフから抜けてはいしなかったこと、第二には、しかし「君も……くれないか」という堀書簡の口調に、出席するのが当然とは云えない(又は、出る気のなさそうな)相手に対して、通知というより意向をうかがうとでもいった気配が感じられることである。前述したように二十五日からそう遠くはない時点と推定される堀宅の会合には葛巻はちゃんと出席しているのだが、それでも気安い呼出しをし難かった(堀宅の会合は発信の時点以後だったとしても)のであろうか。そして第三に、少なくとも余り精勤はしなかったらしい葛巻をも誘った——即ちどうでもよい性格の会合ではなかったらしい時期に、立原が列席している、ということである。名目とはもあれ実質的な『四季』スタツフへの立原の位置づけは、この辺りでは既に始まっていたと認められよう。<sup>(注4)</sup>

そこで今、頭序の予定スタツフ及び十五号の時点で追認された(同人)五名を並べてみると、大正三年生まれの立原は年令的には最年少(丸山薫が明治32年生、三好33年、堀37年、葛巻・津村42年)、詩歴でいえば、最も年令の近い津村に比べてもはつきりと、未だ無名の存在だった。即ち、立原に五歳長じた津村は既に同人誌詩人の域

を脱して、二年前の昭和七年、第一書房発行の芸術中心の文化雑誌『セルパン』十月号に「林間地」「南で」を、十二月には『詩と詩論』の後身のモダニズムの中心詩誌『文学』第四冊に「雪と膝」他八篇を、それぞれ発表、翌八年に入ると国民新聞三月二十八日号に「矜持」「夏の休暇」、『セルパン』八月号に「山脈地方の手紙」、又、文芸復興の気運を背景に創刊され昭和十年代文芸雑誌を代表する一つとなる『文芸』(改造社)の十一月創刊号に「若年」「OLD SO NGS」「手紙」、東京帝国大学新聞十月三十日号に「日記」が掲載されている。就中、『文芸』からの詩稿依頼は津村自身にも「まこと吾が文運に曙光をみる」(一九三三年日誌)と意識されていた。「四季」復刊の話が堀と三好の間に持ち上がった(『四季』再刊について)のは九年一月と謂われるが、それ以前に既に津村はより広い文芸ジャーナリズムの場で頭角をあらわしていた、といえよう。「四季」のスタツフ固めが進んでゆく九年上半年期にも、津村は更に『作品』『文芸汎論』(各三月号)、『世紀』(六月号)等の総合雑誌・総合文芸誌に作品掲載の場を揚げつつあった。

これに対して立原は、六年七月以降頻繁に三木祥彦のペンネームで前田夕暮主宰の歌誌『詩歌』に口語自由律短歌を投稿し、七年にはその年刊歌集にも収載されていたものの、狭義の詩作及びのち彼の文学の重要な一面を構成することとなる所謂散文物語に於ては、『四季』参加前には後者<sup>(注5)</sup>を一高校友会誌及びごく内輪の友人同士の同人誌に発表しているのみである。「四季」発足後その第二号(昭9・12)に掲載される「村ぐらし」「詩は」の二篇が公刊誌紙への初登場なのであって、(詩)誌『四季』のメンバーたるべく殆ど未知数の存

(注6) 在として、加わった、というのが実情だったろう。

## II

この津村に対する立原の関心は、同人誌『四人』の入手希望をいだいた九年五月(?)頃より、余り溯っては確認し難い。九年五月二十五日消印の中村整宛書簡に「津村信夫つて人に こんな詩がある」として、(残り僅かな余白の前に途方に暮れてしまふ)少年の(書きたかつたことは、この文字のない部分ではなかつたか)という「手紙 つて 詩」(『文芸』創刊号)を書き写し、立原自身の「余白がおもくなり 長い手紙 書くなんて めんどに」成った気持と共鳴させ、「あ、この詩。」と結ぶ。だがその際の「……つて人」……つて詩」という取り上げ方は、親炙や傾倒にはまだ距離のある、関心の質的軽さも感じられようか。そこに截り出された心情に関する限りの・同質的かつ等レベル的な共感||親近感を、さして越えぬものだったようである。

『四季』の(同僚)となった翌年、津村は第一詩集『愛する神の歌』を上梓する(昭10・11刊)が、立原は詩集の刊行前、既に

「愛する神の歌」はリルケの「愛する神の話」のまねのやうに思ひ、へんな気がしたけれど、やつぱりよい題でした。「愛する神の歌」といふのは、やつぱりリルケでなく、津村信夫の詩集でした。

と、まず詩集題名に対する感想を書き送り(昭10・7・16消印)、十一月末刊行された翌春早々には「肩いからせて」(11・1・10消印津

村宛書簡)『四季』十五号掲載の津村論「愛する神の歌」を執筆する。この評論には、例えば題名の(愛する神)を、

北信濃の、星の近い小都会で、津村信夫を愛することだけしか考へない、身を以てグレエチヘン挿話を架けてゐる、たよやかな愛する神。そして、愛しても愛しつくされぬ、愛しつくされない。

と釈いて、当時長野市に住み、のち津村夫人となる(十一年十二月結婚)小山昌子さんのイメエジに、躊躇うことなく結びつけるような注目すべき見解も含まれているが、それが立原自身の側にも何かをもたらず結果に繋がる指摘としては、まず

僕は、この詩集から一篇一篇の詩を読まなかつた。全体として、一つの物語ロマンを読んだ。それは、音楽で語られてゐる小説と云へば云へる。

という(物語的構成)の発見が、しばし挙げられる。これは翌十二年七月刊行の立原の第一詩集『萱草に寄す』の構成にヒントを与えたことが臆測されるのだが、しかし、『萱草に寄す』の構成上の特徴としては以後第二詩集『暁と夕の詩』第三詩集『優しき歌』にも踏襲される、全十篇(三章構成)という篇数枠の厳守ということもある(章立ては第二・第三詩集には無し)。この方は津村詩集の全六十四篇(四章)という殆ど無方針と思われる数量面とはむしろ対照的だとすれば、(物語性)の共通のみを取上げて詩集単位の相関関係のごとくに取做すのは正確であるまい。それよりは次のような、詩篇自体の本質指摘の方に注目したい。

まず立原は、比較的早い時期の詩を蒐めた第一章「馬小屋で雨を

待つ間」について、

ここで気づくのは、言葉の持つ観念美でなくて、もつと物質的な、言ひかへれば世俗的でさへある、人生派風な明るいほひを、彼が見出してゐること

であり、「それらの言葉に、人生に甘えるやうにして、甘えてゐる美しい幼さ」だという。だが「幼さは直に失はれずにはゐない」。少年の詩がその「言葉の美しさ」の足元を「成長」によって崩された時、詩人にとって「言葉」はどのようなものになるか。

立原はそこでアーサー・シモンズの「言葉は疑ひ深くて悪意がないでもない、且、暴力を拒むに火や水の触れ難い抵抗力を以つてする。言葉が扱へられるのはただ詭計を以つてか、信用を以つてだ。」という警告(岩野泡鳴訳『表象派の文学運動』より)を想起し、かかる時、愛惜を以つて言葉に近寄つた詩人は、或は傷ついたかも知れない。しかし彼には人生があつた、日を日に比べることなく、直接に万事をそこから学ぶ人生であつた。そして、傷つかないうち彼は言葉に身を凭せることを諦めた。

その結果として

(第二章「雪のやうに」について)ここにあるのは、ただ人生のひたすらな嘆かひである。決して言葉は言葉として彼の心に去来しない、もはや昨日のやうに。言葉は唄として、彼の唇にしづかにのぼつて来るばかりだ。(略)そこには憂愁もないのだ。悲哀もないのだ。誰にむかつてうたひかけもしない。ただ彼と併と、人生を語りかはしてゐる姿であつた。慰めであつた。

又、

(第三章「北信濃の歌」について)歌が、やうやく結晶してゐた。結晶してしまつて、それは何も疑つてゐない歌なのだ。

と結論する。この最後の「結晶してしまつて……」辺りは、この詩集に対する嘆賞よりは不満足に近い感情の存在を想わせる語調ではなからうか。しかし立原は、あらわな「不満」へ「欠陥」として提示はしなかつた。この部分だけを見れば不満を気どらせるとしても、冒頭に置かれた総括の「これに就いては話したくないと思ふ程、或は手近かに置いておいて読まなかつたと言ひたい程(略)懐しくてたまらない本」であり机の上に「静物のやうにただちつと、珈琲茶碗やペン軸や護謨やナイフや色鉛筆などと一しよくたにのせられてゐればよいのかも知れない。」といった、指摘の内容は後文中の評語と違ひはしないのだがその口調の肯定調によって、全体として否定的評価とは感じさせ難かつたらう。

この評論に先んじて同人誌『未成年』第四号(昭11・1)の「日記・書簡・手帖」欄に寄せた「いろいろなこと」に於ても、同じ事態をさして

憤怒や蹉跌の、すこしもないことは、それがこの本のひとつの美德なのであらう。(略)だが、たいへん美しいよ本——

というふうには、云う。この性格が不満として示されるのは、立原がその短い生涯を通じて最も親炙した相手の堀辰雄に対して極度に高潮した対決感情をうたい上げた詩的評論「風立ちぬ」(堀の小説と同題名)のVIII章の、生前公刊されなかつた別稿に於てである。立原の眼に映つた小説「風立ちぬ」は、「風景」と互いに誘ひ誘われるまま「拒絶」を欠いた「詩人」の「内部が外部との限界をなくして」随

所に「美しい絵」を「氾濫させ」ているのだが、より早い時期に「かつて『愛する神の歌』が風ひるがへりながら、誇り高い弱年の日に、この氾濫を完成しなかつたか。」と、引合いに出される。

ここで、詩集『愛する神の歌』・小説「風立ちぬ」と対照的な「一切の風景が色もなく形もなく思索と詩の輪郭とを残して消え去つた」[「拒絶」の世界として例に引かれた田中克己の詩集『詩集西康省』（昭13・10刊）は、評論「風立ちぬ」の最終部分（『四季』昭13・12）と前後して発表された（『四季』昭13・11）評論「詩集西康省」で、「僕ら」又は「僕らの『午前』とも呼ぶべき異質の時代』の行く道を示すものとして、改めて、深刻な共感を語られる。

『詩集西康省』を立原は殆ど常に「伊東静雄」と、或いは並称し、時に対置させている。即ち前引「風立ちぬ」別稿では「美しい絵の氾濫を許してゐる」精神に「対する者として、『わがひとに与ふる哀歌』や『詩集西康省』を見たまへ」と並列したかと思えば、著者田中克己宛書簡（昭13・10・4消印）での感想には「伊東さんの場合よりもなほこの精神は拒絶してゐないだらうか」と、又評論「詩集西康省」の中では

伊東静雄にあつて、詩素と呼ばれた場と、この詩人にあつて輪郭と呼ばれる場とを注意してくらべたまへ。ふたつの拒絶といふ言葉は、ふたつの極となつて、僕らのまへに淵をひらく。

と、その「隔絶」——云いかえればどうしても他ならぬ『詩集西康省』の「拒絶」でなければならぬことを、強調するのだが、津村論としては、『愛する神……』と一括対置された伊東と田中の間の「小異」はとくに問題とするにあたるまい。

ところで、田中克己への共感がそうであつたのと表裏して、津村への批判も又立原にとって他人事ならず発想されたものだらう。前引田中宛書簡で、『……西康省』と対比しての反省として

僕がゴギトで、ズスヘンなどよんで、そのあと甘美な小曲にそれをつくりかへてゐたこと、まちがつてはゐなかつたが、正しくはなかつたらうとおもひます。こんな心情をもうすこしくはしくかんがへて、四季あたりに書きたいとおもひます。

とする。「書いた」結果が前出の評論「……西康省」と思われるが、右書簡によればそのモチーフはこの「心情」の内に胚胎したものなのである。このあたりの優先序列は都会人立原のたしなみも働いているのかも知れないが、少なくとも『……西康省』批評が自らに撥ね返つて来ざるを得ぬことの自覚が存したその事自体は、動かし得まい。その、反省される既往の自己の、いわば拡大像ということにもなる「拒絶」を放棄した津村詩集が、この時期——即ちわかい晩年となる（昭14・3・29歿）立原にとって、他の基準から肯定し賞美することはあり得てもともかくも自分は陥つてはならない——しかし資質的には十分陥り易く既に何程かは足を取られもした——轍、自分の行く手からは何よりもまず排除せねばならぬ誘惑の、一具体例と考えられたとすれば、それへの批判は実質的には自分への鞭として、能う限り熾烈であらうとしたことも推察し得る。しかしそうした意味の排除以前に、或いはそれとは別に——というのは排除と時間的には重複する時期にも、津村の語句を鑑賞し、異なる（べき）内実にまとわせるいわば衣裳として自己の表現に積極的に関らしめる、という感覚上の親近・愛好が並存した。



時間を追って挙げれば、推定十年八月起筆の遺稿ノート「火山灰」と、津村が『四人』第四号(昭7・7)に発表した日誌風小品「火山灰」との、題名の共通が屢々指摘される。しかし、津村文の掲載誌を立原が手にしたのは九年初夏と思われる(前述)からその印象は十年夏にもさして色褪せていなかったろうが、そもそも何故一年後の時点で自分のノート題名に模倣する気を(ようやく)起こしたのか。恐らくこの夏滞在した信濃追分では望見した浅間の噴火、とくに八月十七日(注8)には珍らしく信濃追分までも「村を歩くと足はすつかり砂にまみれ」「屋根は灰に蔽はれ、くらしい色」になった(8・19消印津村宛書簡)程の降灰の体験に触発されたものと考えるのが、順当だろう。因みに十七日の降灰は、その情景を背景としたその夜の体験が同年九月の作品「はじめてのものに」(『四季』昭10・11)のモチーフとなったものと考えられており、とりわけ印象深かったことも想像される。そういう契機によつて津村の先行例の印象も改めて蘇ったという順序が推測されるなら、津村の例に拠るとのみ云うと正確でなからう。本文の内容からいっても、津村文は避暑地の夏の風俗と抒情を適度に交錯させて彼の散文詩と殆ど区別のつかぬ華麗な文体を綴り、「金曜日」から「水曜日」まできちんと章段を分けた、完全に「作品」として仕上げられたものである。それに対し、立原の方は独白あり詩の草稿あり特定の女性(恐らく晩年の愛人M・Aさん)への語りかけありの、文字通り「ノート」と呼ぶしかない雑多な内容であり、当然ながら第三者の理解を顧慮していない表現と云え、日付も殆どない。分量も立原文は津村文の八倍に近く、むしろ両者の相似点を捜すのが困難な程であつて、およ

そ一方が他方を模倣する意識があつたとは考え難い物になつてい

る。  
但し二つの「手記」の關係の、周辺の状況として、右にふれた立原の詩「はじめてのものに」の三節一行目

——人の心を知ることとは……人の心とは……

と、津村の「火山灰」と同号『四人』に掲載された詩「花樹」二節中の

人の心を知ることとは、その心を把へることは……。

という句との類似は、一名詞「火山灰」の共通と違って偶然とは考え難く、立原詩は津村詩に、少なくともヒントを得た発想であろうとは云えよう。そうすると、語句単位でヒントを与えてくれた津村詩全体の、その背景となった「日誌」と、同じ日誌(こちらは正真正銘の)同士、という迂回した繋がりを辿つて、津村の用語としての「火山灰」が立原に親近感を与え、扱ばしめる助けとなつたことも想像出来ようか。

そして翌十一年、既に年初早々前引二つの津村論の中にひそやかな不同調意識を書きつけた立原なのだが、この秋予定された『四季』読者対象の追分での合宿(注9)の期日選定について、津村と打合せた書簡の中に

追分の合宿は(略)季節よく、何よりも「美しい日和のときれようとする」日々の合宿の方がいいとおもひます。

(7・30消印)

と書く。「美しい日和」云々は『四季』十年二月・第四号掲載の津村詩「抒情の手」第三節

美しい日和は、ほんたうに幾日つづくだらう。

美しい日和はこと切れた、私達の胸ぬちで。

の後半の引用（応用）で、作者の対人姿勢とか「詩」観とかの問題と一往切り離れた、津村の語句への嗜好は未だ薄れ去ってはいないことを想わせる。この季節の印象を詠嘆調で提示しようとする時、基本パターンとして口へのぼったのは一年半前の津村詩の一句だった、という訣である。

その「抒情の手」に立原は、更に想定同年十二月（堀内達夫・全集一卷編注）制作の遺稿詩「田中一三に」で本歌取りを挑む。即ち三篇から成る組詩の第一詩を「1 『抒情の手』に倣ひて」と小題し、本文にも津村詩での印象的な冒頭行

美しい日和は あと幾日つづくだらう。夏の終り、日のをほり。  
を、二節四行目に

高原の夏のをほり、日のをほり、

（傍点原文）

と、殊更あらわに借用する。しかし語句の借用（「愛着？」）とどうらはらに、詩の主題は津村詩のそれへの抗議ともいえるものだった。

津村詩の三節（前引）及び四節（終節）

それを信じないのはお前だけだ。

それを知らないのはお前のみだ。

を、立原は真向から撥ね返す。立原詩の終節

信じてはならない 美しい日和はこときれたとは

告げてはならない さらば われらの強き光よ！とは

——いつまでここに立ちつくしてゐる私たちだらうか？

（傍点引用者）

の「美しい日和」云々は前引立原書簡での用法（引用法）に徴しても、立原にとつても亦津村詩のさわりと謂つてもよい部分であり、「さらば……」は津村詩二節に

空なる馬のいななき、うち振るたて髪に、「秋の歌」が聞えるやう。

と引用されたボードレルの「秋の歌 (Chant d'automne)」の、第一部一節二行目（『珊瑚集』所収の荷風訳では「夢の間なりき、強き光の夏よ、さらば。」）を指す趣意と思われる。つまり立原詩は津村詩の語句を採り、津村詩で題名を引くに止めた作品はその本文に復原して（その意味では元の津村詩以上に、明瞭に）津村詩の主題を再現し、そのヴァリエーションを高唱してみせた拳句に急転直下その否定に持ち込んでいる訣で、人次第で随分あくどい仕打にもなりそうな技法である。更に「秋の歌」のこの句は「さらば、東の間の我等が夏の強き光よ。」という形で前引津村の「火山灰」のエピグラフに用いられてもいる。とすればこの句をへ告げてはならないと禁圧することは、津村の文学的境地全体への或る意味の封印であり、更にその「火山灰」を自己のノート題名に襲用することに少なくともこざわりは無かつたおのれの既往への、苦しい自嘲をも、下に湛えたものだった筈である。

——苦しい自嘲、と云い、下に湛え、と云った。決然たる否定を眉宇に表わして、と云えぬのは、例えば立原がその「火山灰ノート」を、翌々十三年八月（ノート最終記事の日付）まで、断続的ながら書き継いでいるゆえである。破棄も中絶もせず、題名の変改といっ

た児戲的(へ決然)さで糊塗することもなくその儘、呟きを閉じ籠めるノートという最も身近な同行者として存続せしめるのである。そうした撞着は、「抒情の手」に倣ひて「自体の中にも感じられぬでもない。技法的にはかなり一念の入ったと云える四節の抗議は、三節までの帰結として必然的に凝集したものか(そう、感じさせるか)といえ、むしろその逆であろう。「美しいかがやかしい色どり」の「あの夕やけ」(二節)は、「夏のをはり 日のをはり」に於て顧みれば「果敢ない私たちの冒険を誘」った(二)「うつろふ東の間の激しい夢」(三)と観じられる。そうした観照を「信じてはならない」という終節の逆転は全く継ぎ穂なく直せられるのであって、結果として未熟・生硬と評されるのは避けられまいが、立原の身になって云いかえるなら、(否定)を念いつつもその情感に感応し共振するものを身内から払拭し去った訣ではなかった——本来立原自身のものである情感だったことの、証でもあったろう。いわば近親憎悪的な否定、或いはもっと切実な、鏡に映った自己の像への訣別という性格は、評論「風立ちぬ」での堀辰雄否定にその典型があった。そして、そのような立原の(自己の投影としての)津村否定に対して、津村の側からの反応は遂に見られなかった。「風立ちぬ」で津村より遙かに激情的に対決を挑まれた堀も、立原歿後の十四年間に結局正面からは反論も承服も返さなかったのだが、立原の五年後に早くも世を去った津村(昭19・6・27歿)はもっと無言のまま時を移らせた。立原によって対決せしめられた『詩集西康省』についても、津村は「抒情の美しさときめてかかれぬ」「寧ろ、思考的な美しさにみち」た「極めて簡潔な短詩」をとくに賞美し、「うかつに読

んで、そのま、酔ふことを許されない」こと、「過去の詩篇の要素となつてゐたものが喪はれ」「諸々の要素を必要としない」、「物に拠つて詩を書く態度から一步脱けた感じ」があること——に、着目した(『コギト』昭13・11、「晩食の後——『詩集西康省』に就て——」)。抒情性に対する思想性乃至観念性、日常生活の玩賞乃至それへの埋没に対する背離、等、津村がこの詩集の特徴と見たものと、立原が堀に津村に対決する要素として見出し感銘したところのものと、対象自体としては殆ど重なり合うといえよう。しかし津村はそれを「今後田中克己をあるかせる道」として「私のもつとも注目するものだ、と——是認か非難かと云えば明らかに是認しながら、(私の道)とは云わなかった。私はとらない、とも又云わなかった。(田中の)それとして肯定し、評価し、そしてそこで津村の関心は完了したようである。

津村には彼と此とを、併存し得ぬ対立、或いは彼が是ならば此方は非という二者択一として捉えることが、欠けていたのかもしれない。しかし敢えて云えばそれ以前の、やはり併存困難な或一つの問題に津村は直面させられていたようである。時間差を無視していえば十六年から十七年にかけての、前引一九三四年日誌とほぼ同趣の全く自家用と思われる日誌中に、世間普通の用法での家庭生活乃至家庭人としての生活と文学創作との一致願望が、散見する。「尋常の生活や心理では到し得られない」かに見える「文学と云ふ仕事」を、しかし自分は「尋常の心理と生活で押して見」たいという「理想」をもつ(『太郎日誌』、昭16・5・29)津村は、「たとへば子供に対する愛情、さう云ふものが素直に詩になり芸術になり、子供を抱いて

守りしながら詩を考へる！そんな境地」を「一つの理想」ともする（「鎌倉日誌」、16・8・22?）。勿論その「実行は困難」と判つてはいるが、その両立・一致し難さを

自ら満足した状態、平衡のとれた心の状からは、如何なる詩も生れないものか。

（同前）

いろんな人生に於ける欲と云ふものを切りすて、みると、結局、家庭生活のよさになる。心はいつも内に向いてゐる。それだけ感情の均衡がとれる。この感情の均衡そのものが詩になるとなほ、さらしい。

（「初枝日誌」、17・6・23）

と把える時、彼は「自足した家庭生活」の側に身を置いて、その既得の立場からの「詩」の生成の能否を案じている。もし仮りに、遂に不可能と決つた窮地に於てはどちらが及び残されるだろうか、と、仔細を切り捨てて想像してみると、次のような軽重の断案が参考になろう。既に功成り名遂げたというべき或る老女流歌人について、津村は

女とくに主婦となつた女の人が文芸の道を歩くと云ふのは、間違つてゐるだけでなく、第一不可能な事だと思つた。／女の場合は、文芸に身をまかすと、それで一杯になり余裕がなくなり、予想とは反対な、情操の欠けた人間になつてしまふ。

（「太郎日誌」、16・6・15）

と、「文芸の道」の断念を当然すぎる決着と見、「主婦」からの離脱などは考えてもみない。勿論これは「女の場合」両立不能と判るの

が早かつたからの「差別」で、男（自分）の選択は逆だと考えていた（！）などと推測する根拠はない。

つまり津村は、立原に於けるように文学Ⅱ詩のありかた、詩人としてのありかたの二方向の並存能否ではなくて、詩人と生活者という人間存在態様の二種の、並存にかかずらい、悩み、努めていたのである。前者の問題について「鈍感」だったせいもあるかも知れないが、順序としては後者の決着がついての前者だとも謂える。では逆に、立原にとって後者の問題はどうか成つていたのかといえ、例えば十三年夏、最後の旅となる盛岡旅行・長崎旅行（昭13・9・10、11・12）の前、立原は「毎日」「月給袋を取り出し、そのなかの金の残りを卓のうえに積み」「細かい旅費の計算を旅程表に当てはめて、金の限度によって予定の変更をも行なつた。」（中村真一郎、新潮選書『芥川・堀・立原の文学と生』）という。生活者としての破産回避と詩人としての漂泊決行が、余りに滑らかに、ことの表層で解決されてしまつてゐるとは云えないか。それではならなかつたと難ずるのも一つの固執だろうが、立原のこの「解決」が底の底まで届いた解決ではないことも亦、確かだろう。

立原は津村の問題をすり抜けた。或いは立原にも、問題感覚の一部の欠落があつた訣だろうか。それを含めて、結局「詩」人立原と「詩人」津村の対立と云い做したら、多寡をく、り過ぎたことにならうだろうか。

注1 奇矯の言ととられぬ為現在立原・津村関係の記録とし

て最も詳密な角川版六巻本立原全集六巻（昭48・7初版）

付載年譜、同三巻本津村全集三巻（昭49・11）付載年譜の、

この件についての「夏花の記」への依拠(?)し方を見ると、立原年譜(鈴木亨編)は堀宅での会合を六月「三十一日」とするのは「夏花……」の「六月末日」を採ったかとも思えるが、それ以前「六月六日」に「堀……津村信夫・立原道造の五人が会合し」たとするのは「夏花……」で立原を「未知の人」に数え入れているのと合致しない(但し第五巻簡篇の堀内達夫作成「編注」五八では「津村の『夏花の記』に拠れば、立原と識り合うのは6月末日」と註する)。一方津村年譜(堀内達夫編)は堀宅で「立原とは初対面」とするのは「夏花……」に合致するが、その日付を「二十五日頃」とするのは「夏花……」を無視していることになる。こうしてみると「夏花の記」は、或いは本稿の扱い以上に市民権を与えられずに来たとすべきかも知れない。

2 五月四日付の津村宛書簡に「君のところに来る予定でしたが、行けさうもないから近いうち君だけでも僕のところに来てくれませんか」、五日付同「昨日、日下部君がきて、大体のプランを決めた。七日午後、丸山君と一緒に、来てくれない。」(傍点引用者、以下同)とある。日下部雄一は第一次(季刊)・第二次「四季」の刊行者、丸山薫は二次「四季」計画の段階から堀・三好と共に共同編輯者に予定されていた一人で、津村は正式の準備組織化する以前の個人的下相談の段階から、その日下部・丸山と同列の内輪扱いをされていたといえよう。

3 立原の「四季」参加を堀に進言したとされる三好達治は、「当時発刊後間もなかつた私達の雑誌『四季』に、彼の作品を需めるべく」堀に「相談をもちかけたところ、その作者ははからずも」既に堀と「親交のある」「一人のうら若い学生であつた。」と(「四季」昭14・7立原道造追悼号、「立

原道造君)、発刊(昭9・10)前には立原を識る機会が無かつたものように云う。これはしかし準備段階での立原の参加状況を推測する材料としては弱い。例えば六月六日の会合について津村日誌が堀・丸山の出席は云いながら旧知(七年初夏以来)の三好の出欠にふれていないのは、実際に出席しなかつたのみならず出席予定もなかつた(少なくとも津村には三好も出席するものとは思えない状況だった)からではないか。思潮社版・中村真一郎編「立原道造研究」年譜、文京書房版・小川和佑「立原道造研究」の「四季」年表(共に小川編)のように六月六日・二十五日共に三好出席と記すものもあるが、前年八年七月以降(石原八束編・筑摩書房版「三好達治全集」「定本三好達治全詩集」各年譜)三好は病後の静養の為多く信州発哺・上林温泉に滞在しており、「四季」の計画が進んでいる最中、九年六月二十六日付上林温泉発信津村宛書簡(津村全集年譜所引)に「この間から、健康を損ねたり怠けたりしてゐてまことに申し訳ありませんでした、(略)もう三四日中に一度上京します、その節はお眼にかかり、いろいろお話を承りたし」とあるのは二十五日の会合にも出席していないものと思われる。つまり「四季」発刊前には三好の方で立原を識る機会を放棄していたので、立原自身の参不参に由るものではなからう。

4 文京書房版「立原道造研究」年譜のように立原が五月から既に「創刊に参画」したとするのも根拠が不明だが、逆に、角川版津村全集年譜が「参加決定は、早くても」堀の「四季」再刊についての「発表時以後の八、九月頃」と推定するのも下げ過ぎではなからうか。立原の名を挙げなかつた(未だ葛巻の名を記している)右「再刊について」

を掲載した『四季社・江川書房季報』九号の発行日付は七月十五日だが、同文中に「大体九月一日に創刊します」とある日程について、津村日誌によれば六月下旬(?)の前述堀宅の会合で「四季は残念ながら九月に延期さる」ことが確認されている。六月下旬の時点でまだ準備の打合せをしている段階なのだから、この後何の障害も起らず考えうる限りスムーズに進行したと仮定しても「九月」よりかなり前の時点での刊行は期待薄だろうから、「九月に延期」を残念がるのは発行日の九月延期ではなく創刊作業の延期ではないか(創刊号の実際の刊行日付は十月十五日)。つまり堀文での「九月一日」創刊予定の変更には繋がる決定と思われ、逆に云うと堀文はこの折の延期決定を踏まえていない。それ以前の計画を述べているものと思われるから、かりに右堀宅の会合の時期に立原の参加というスタッフの方の変更も起っていたとしても、堀文にはこれ又掲げられ得なかった訣である。

5 同人誌『偽画』第二輯・九年十月号には散文詩形式(小品とも見うるが初出誌に「詩」と指定がある由・六巻本全集一卷編注)の「子供の話」を発表している。

6 もっとも『四季』の実質上の主宰者としての堀に対しては、立原は推定七年八月二十八日の書簡中にも二篇の短い散文詩をしるしており、九年六月創刊の『偽画』についてのまだ漠然とした計画を語った書簡(六巻本全集五巻編注は四月と想定)にも「さうしたら、僕は、詩を作りたいと思ひます。」と述べていて、詩稿程度は見せていた可能性はあろう。但し三好達治が『四季』立原追悼号掲載「立原道造君」で「未成年」と名のる同人雑誌に、始めて彼(立原)の作品を見出した時、私はそれを一読して「一驚し」堀に

推挙したとするのは、時間的に九年六月創刊の『偽画』との混同と思われ(『未成年』は十年五月創刊)、『偽画』創刊号の立原の作品は物語「間奏曲」だから、右回想に年月自体の錯覚はなかったとしても、三好は立原の「詩」は読んでいなかったのではないか。

7 集中「愛する神の歌」という同題名の詩(初出「文芸」昭9・8)は姉道子の墓をうたったものであり、同篇を収めた本集の題名を別義に解するのは、通例化してはいるがやはり問題があろう。因みに立原は右の詩をも

これは決して姉のことをうたったのではない、第一章の主題であつた、少年時の言葉へのあどけない感情がぐりかへされようとするのだ。

とする。なお本文引用の立原の語は『四季』十年十月・第十一号掲載の本集の広告の推薦文(丸山薫)中の

津村信夫は(略)愛しつくされぬ一人の優雅な神を愛してゐる。「愛する神の歌」とは、畢竟彼女に捧げられた一基の質素な蠟燭のごときものであらう。

(傍点引用者)

に牽かれているかと思われるが、丸山文は立原ほど明確に「姉」のイメージを排し、「愛人」を指示してはいない。

8 8・18消印の生田勉宛書簡に「あさまがきのふ爆発した。灰がふつた。十八日誌す」とある。

9 九月一日から一週間を予定して『四季』十一年初秋・第二十号に「追分案内」と題した呼びかけ(立原作成)も掲載されたが、結局実現しなかったという。

10 堀内氏は想定根拠として、題名に引かれた「田中二三」宛の立原書簡①11・10・3消印及び②同12・24消印の文面を挙げる。①には田中が「立原君に」と献辞を付した詩を

『未成年』に寄せた事への感謝と、立原の方でも「夏以来もう *monotone* で考へてゐる」ことが述べられており、その返札として立原詩の題名が生じたかと考えうる。又、第三詩の題名となっている「時雨ふる京の泊りは墓どなり」の句は、堀内氏の指摘通り同年10・28消印京都発信の小場晴夫宛書簡中の「秋雨や／京のやどりは／墓どなり」の改稿（原型は10・26消印猪野謙二宛での「秋雨や京の東の……」）と思われ、立原詩の成立を同年十一月以降と推測するのは妥当であろう。しかし②書簡は右の京都滞在を回想している内容には第三詩と相通するものの、両者の先後（近接）関係は明確ではないように思う。

11 戦後の堀の唯一の作品「雪の上の足跡」のモチーフを、立原から仕掛けられた対決への間接的な答と見る解釈をさきに提出した（昭48・11『日本文学論研究』三十三冊収、「雪の上の足跡」覚書）が、それもあくまで間接的な、二重三重にくるんでの応対といえる。

（昭55・9・9稿）